

(様式第1号)

自己評価及び外部評価結果票

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4190500035		
法人名	医療法人小島医院		
事業所名	グループホームげんき		
所在地	佐賀県伊万里市波多津町辻5454番地		
自己評価作成日	令和5年1月20日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先URL	www.kaigokensaku.mhlw.go.jp
-------------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 佐賀県社会福祉協議会		
所在地	佐賀県佐賀市鬼丸町7番18号		
訪問調査日	令和5年2月15日	外部評価確定日	令和5年3月29日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>事業所理念を「優しく・笑顔で・和やかに」とし、利用者様のペースに合わせてゆったりとした生活をして頂いています。3週間毎に伊万里市民図書館から自動車図書館の来訪があり、自由に本を選ばれたり、利用される地域の方との交流を楽しんでいただいています。また、天候の良い日には、近所への散歩やベランダでの食事、日光浴、ドライブを行い、気分転換を図っていただいています。リネンの洗濯は業者に依頼し、食事は隣接する施設にて栄養士の栄養管理のもと調理員が調理をすることにより安心して食事をしていただいています。母体病院から看護師がほぼ毎日訪問することで、医療面や健康面で安心して過ごしていただいています。</p>
--

【外部評価で確認した事業所の優れている点・工夫点(評価機関記入)】

<p>事業所の特長は、ごく近い場所に法人母体の病院があり、定期的な訪問診療や一日に2度の看護師によるバイタルチェック等が行われている事、また別棟で行われる調理には専門の担当者がある事などが挙げられる。それらは健康管理や医療面に関しての安心感となり、職員には利用者と関わる時間にゆとりが持てる相乗効果である。歳を重ねる毎に出来ない事は増えるものだが、職員からは失敗は当たり前という声が聞かれた。各々が意見を持ち、自由な発言ができる職場環境の良さには自負も窺える。利用者との距離が近いからこそ、笑顔を引き出す工夫や声掛けも活きている。デイサービス事業が閉鎖され、高齢化が進む地域の拠り所として奮闘している事業所である。</p>

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「優しく・笑顔で・和やかに」を基本理念として事業所内に掲示し、利用者や職員も笑顔になれる介護を目指し携わっている。	開設時に職員達が作り上げた理念は、常に立ち戻る原点として現在に至っている。事務室など数か所の目に付く場所に掲示され意識付けを図っている。利用者に声を掛ける様子や、笑顔を引き出しながら共に過ごしている穏やかな時間には理念が活かされているのが窺える。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の方々と日常的に交流があり、催し物やお祭り、お悔やみ事などの情報を得ている。その情報により、ふれあい広場での催し物の見物や地元の祭りの見物など行き、地域との関わりを持っている。	コロナ禍と隣接するデイサービス事業の閉鎖により、利用者の行動範囲はめっきり狭くなった。しかし、久しぶりの祭りや催し物があると聞けば、感染対策をしながら短時間でも出掛け交流を楽しんでいる。訃報等は地区放送で流され、地元の職員もおり細かい情報も届いている。近隣住民と挨拶を交わす散歩は日常的な光景であり、緊急連絡網の登録者には3名の住民もいる。未だ制限されることが多い中で、事業所は地域との繋がりを保ち、基盤を築いている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議において、認知症に関する勉強会を行うなどし、家族及び地域の方達に向けて認知症の方への理解を深めてもらえるような支援を行うよう努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議を2か月に1回開催しており、利用者の状況報告や事業内容の確認、意見交換を行いサービスの向上に努めている。民生委員や地域づくりサポーターの参加もあり、地域の情報も取り入れるようにしている。	コロナ禍ではあるが集合しての会議である。対面ならではの細かい情報も得られ、双方向な意見交換の場となっている。家族の出席もある。消防団員からは、避難誘導に関わる際の介助方法を知りたいと意見が出され、訓練に活かしたいと考えている。認知症に関する勉強会を行ったり、メンバー同士が顔見知りとなって相談し合う場面もみられる。自己評価では、この会議を通して地域との繋がりが深まりが少しずつ増えていると答えている。	

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者とは日頃より疑問点などがあった時には電話にて質問をしたり、運営推進会議時に直接質問を行うなどし、協力関係を築いている。	運営推進会議のメンバーでもあり、日頃から顔馴染みである。問い合わせや相談事があればまず電話を掛けており、適切に対応してもらえる関係を築いている。隣接するデイサービス事業が閉鎖した事による次の展開など、行政側にも協働の姿勢が窺える。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束のマニュアルを作成し、定期的に研修を行うなどし、知識を深めている。3か月に1回は身体拘束適正化検討委員会を開催し、ケアの見直しを行い、気付かないうちに行っている言葉などの拘束はないか、などの意見交換を行っている。夜間以外の玄関の施錠はせず、自由に入出入りできるようになっている。	入居契約時に指針の説明を行い、必要が生じれば同意書をお願いしている。職員は身体拘束の内容やその弊害まで理解しており、現在その実施例はない。玄関にセンサーはあるが施錠はしておらず、職員が目配りや気配りによって安全で自由な暮らしが支援されている。外へ向かう方がいても行動を抑えることはない。仮に不適切なケアが見られた場合は、まず本人に話を聞く事から始め、気付かせる話し方を心掛けている。ケースによっては全体の事として問題提起するとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的に研修を行い知識を深めており、日頃のケアで何気なくしていることが虐待につながっていないかなどの検討も行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在は、成年後見人制度が必要な方はいないが、今後対象者が出た場合は必要性を検討していくもの、としている。外部研修などで学ぶ機会があれば参加することとしている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には利用者と家族には十分な説明を行い、納得された上で契約を行っている。また、疑問や質問などがある時には、いつでも相談できる旨を伝え、契約書には相談窓口、担当者を明記している。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者や家族の意見には常に耳を傾け、意見や要望を今後の運営につなげるよう努めている。コロナ対策により、家族の面会も短時間でお願していることもあり、ゆっくりと面談しながら意見を伺うことは難しいが、電話やお便りにより現況をお知らせし、家族の要望を聞くなどしている。また、運営推進会議では、毎回家族に参加いただき、意見発表の機会を設け自由に意見をいただき、それを運営につなげている。	毎月の利用料を敢えて持参でお願いしているものの、コロナ禍では来所や面会にも規制せざるを得ない状況である。家族と向き合いじっくりと会話をする機会が減っている現状では、ホーム便りや請求書発送の際に近況を添えてはいても、それぞれの想いにズレがあるのではないかと問題意識も持っている。毎月行うモニタリングの結果報告も兼ねて、月に一回以上は電話を掛け、意見や想いを汲み取ろうとしている。遠方に住む家族とはビデオ通話で顔を見ながら話してもらったり、要望等があれば前向きに活かそうとする姿勢も窺える。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的に業務会議を開催し、職員の意見交換を行っている。また、申し送りノートを活用し、ケアの仕方や業務内容について、それぞれに気付いたことや意見を書き出し、随時検討を行っている。	月一回の業務会議には概ね60分を要し、休みの職員はリモートでの参加もある。主にカンファレンスを行い、勉強会等も組み込まれている。自由な発言の場であり、事前に意見を書いておくノート類もある。理事長同席のため現場の声はダイレクトに届いている。最近の意見では厨房担当へ、レパトリーを増やしてほしいとの意見があり伝えられた。また管理者としては働きやすい職場となるよう配慮も必要で、定時での帰宅を促し休暇希望に応えながら、日頃のコミュニケーションではメンタル面にも注意を払っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の勤務態度や実績を把握し、法人代表の理事長へ報告をしている。給与や労働時間、職場環境の整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	施設内研修を行ったり、また、外部研修に参加しその研修報告会を行ったり、回覧することで情報を共有し、職員のレベルアップに努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	業務内容等で疑問に思ったことなどを他事業所の方へ質問をしたり、グループホーム協会主催の研修には参加するように努め、他事業所との交流を図り、意見を取り入れている。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用者の基本情報を把握し、その方の生活履歴を理解することで、コミュニケーションに広がりを持たせている。本人の話しを傾聴し、不安なことや要望を伺い、安心して過ごしていただけるよう、関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	面談時に家族の意見を傾聴し、不安なことや疑問なことを伺い、説明を行うことで不安の解消に努め、信頼関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族と話し合いを行い、必要とされる支援を把握し、まずは安心して過ごしていただけるよう環境を作り、支援を行っている。		
18		○本人と共に過ごし支え合う関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	洗濯物干しや洗濯物たたみ、料理の下ごしらえや調理などをされることにより、ご自身の役割や生活を感じていただいている。		
19		○本人と共に支え合う家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	利用者の状態の変化時や、必要な物品がある時などは家族に連絡をとり協力を得ている。また、定期的にお便りやモニタリングなどを行い利用者の状況を報告し、家族より意見をいただいている。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	近所のスーパーへ出かけたり、近所を散歩するなどし、また、行きつけの美容室へ通っていただくことにより、馴染みの人や場との関わりを保っている。また、電話やテレビ電話を利用し、家族や知人との交流が保てるよう支援を行っている。	入居までの人間関係を把握するためには本人や家族、また担当のケアマネージャー等から話を聞き情報を集めている。それらを基に具体的な支援として、盆正月の帰宅(宿泊もあり)や墓参り等があったが、コロナ禍では自粛も多い。そのような状況下でも感染対策に留意し身内の葬儀へ出向かれた例もある。電話の取次ぎはいつでも可能であり、携帯電話を持つ方は自由に使用している。年末には年賀状の準備をし、ホーム便りはキーパーソン以外の希望する家族にも届けている。利用者が大切にしてきた関係が途切れることのないよう支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	利用者同士の関係を把握し、ホールの席の配置を配慮したり、職員が間に入り会話を促すなどし、利用者同士の関係性を深めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	長期入院になられた場合も、時折家族と連絡をとり状況の確認を行い、相談などに応じている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	今までの生活歴や利用者との日々の会話の中から本人の思いをくみ取り、なにを希望されているかなどを把握するように努めている。意思表示の困難な方は、本人の立場に立って考えるよう努めている。	日々の関わりの中で隣りに座り爪を切ったり、スキンシップを交えながら話し相手をしている時には想いが聞けることが多い。目線を合わせながら、笑顔があるかどうか、テレビの情報もきっかけに利用してみたり、また言葉数の少ない利用者には選択肢を示す問い掛け方等々がごく自然に行われている。利用者の中にはお気に入りの職員を待つ方もいる。聞き取った事は口頭やノート類、また個々の経過記録簿に記し共有を図っている。そこからケアプランに反映させた例もある。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族、前任のケアマネージャーより情報を得て、入居前の生活状況の把握に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の一日の様子を観察し、経過記録に残し、その方の過ごし方、心身状態、残存機能の把握等に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者や家族、職員とケアカンファレンスを行い、課題やケアのあり方について話し合いを行っている。よりよく暮らしていただくため、それぞれの意見やアイデアを出し、現状に即した介護計画となるよう修正と変更を行っている。各々の介護計画書はすぐに確認できるよう、複写分を1つのファイルにまとめている。	ケアプランは、入居して間もない時期は3か月毎に見直しを行い、徐々に落ち着けば短期で6か月毎、長期では一年としている。その間に変化があれば臨機応変な対応もある。本人の希望は日頃のケアの中で把握し、家族の要望等は来所持や電話での会話から汲み取ろうとしている。家族からは現状維持を願う声が多い。何にでも手を貸すのではなく、安全に配慮しながら見守っているケアがあればこそ残存能力の維持へと繋がっている。日々の積み重ねの成果である。またプラン実施状況は経過記録簿で確認され、計画作成者による毎月のモニタリングは、その後、家族へも報告されている。当外部評価アンケートでは、ケアプランでは説明を受け一緒に話し合っていると答えた家族が殆どである。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の経過記録を日々記入しており、情報を共有している。また、提案や気づきがあれば申し送りノートに記載し、ケアに反映できるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族の要望により、通院介助や入退院時の支援を行うなど、利用者や家族の望まれる事に対応できるように努めている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	隣接のデイサービスが閉鎖となる以前は、デイサービスを訪問し会話や演芸の発表を楽しまれていた。地元の秋祭りにも参加し、楽しまれている。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診診断 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居前まで母体病院の患者の方が多く、各々隔週火曜日の往診を受けている。体調変化時には随時受診や往診を実施している。かかりつけの専門医がある方はそのまま継続し、家族の支援をなどにより、定期的に受診されている。	法人母体は病院である。利用者は元々その患者だった方が多く、病歴等も知ってもらえている安心感がある。また入居後に訪問診療等の説明を受け、かかりつけ医にと希望した方もある。徒歩数分の場所にある病院から看護師が訪れ、利用者は一日に2度のバイタルチェック等も受けている。家族アンケートでは、健康管理や医療面での不安はないと答えた方も多い。他科受診での病院選択は本人や家族の希望に沿い、付き添いは基本的に家族対応である。職員が付き添った場合、家族への結果報告は当日中に行っている。	
31		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日曜、祝日以外は午前、午後の1日2回(土曜は午前のみ)の母体病院より看護師の訪問があり、その日のバイタルや気づきを報告している。異常があった際には都度看護師より主治医に報告をし、受診や往診ができるよう支援を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院される場合は、職員が付き添い、現在の情報を伝えたり、本人や家族の意向を代弁したりし、適切な対応をしてもらえるよう連携をとっている。入院中も病院側と連携し、適宜状態確認を行い、早期退院となられるよう努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に、重度化や看取りに関する指針について説明を行っている。また、看取りについての事前確認書への記入をしていただき、本人や家族の意向を伺っている。利用者の容態の変化時には本人や家族の意向を伺い、その時の意向に添う支援を行う旨を伝えている。	入居契約時に指針の説明を行っている。その際のアンケートでは、終末期の選択として病院も挙がるが、分からないと答える方も多い。過去には看取りの経験があり、希望があればそれに応えたい想いはある。そのためには事業所の力量や体制の見極めと、職員のフォローも必要である。現状では、容態の変化に伴い揺れ動く家族の気持ちを踏まえ、何度でも話し合う事としている。その場にはキーパーソン以外の家族参加も勧め、医師の同席もある。本人や家族が安心して納得した最期を迎えられるよう支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時のマニュアルを作成し、心肺蘇生法やAED取扱いの研修を行うなどし、実践力を身につけるよう努めている。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回、利用者も参加し消防避難訓練を実施している。その内1回は夜間帯を想定し訓練を行っている。火災通報装置を設置し、火災発生時には近隣の方へも通報が行くように設定している。訓練時に通報装置を作動させ、連絡がスムーズに行くかの訓練も行っている。水害時の避難訓練も実施しており、移動ルートや移動時間、持ち出し物品の確認等を行っている。	年2回の訓練は昼間帯に行い、夜間想定では夜勤者とみなした職員のみで初期対応を試みている。利用者も一緒に避難を体験し、職員は消火器や通報装置の使い方も承知している。緊急連絡網には3名の近隣住民が登録され駆け付けの手筈になっており、外部の応援者が介助の度合いを知る方法や、居室から退避済みの合図も決めている。非常食や水の備蓄をし、自然災害に備えてハザードマップの確認も行っている。避難場所は火災時と自然災害時では再度見直す事とし、家族への周知も含め課題としている。直近の業務会議では訓練の反省や改善策の検討も行っている。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	接遇の勉強会を行い、尊厳ある関わりを心掛け、言葉かけなどなれなれしくならないよう、不適切な言葉遣いとならないよう心掛けている。不適切な対応があった場合は、職員同士で注意しあえる環境作りに努めている。	入浴やトイレでの介助は羞恥心への配慮が必要で、入居して間もない時期は特に、その気遣いが窺える。トイレのドアを開けると、その先に2つのトイレがあり、それぞれの個室はカーテンで閉めるようになっている。自立している方へのさりげない確認や、介助が必要な方へのプライバシー確保など、基本的な事をきちんと行っている。また個人情報の取り扱いに関して職員の意識は高く、業務上のやり取りであっても声の大きさには注意を払っている。ホーム便り掲載や居室の名札掲示も入居時に承諾を得ている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者とのコミュニケーションの中から、その方の思いや希望をくみ取り、また、自己決定しやすいような言葉かけを意識している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのペースで生活を送っていただくよう努めており、居室やホールなど各々過ごしたい場所で各々のやりたい事をして過ごされている。散歩やドライブなどの外出希望があれば、希望に添えるように努めている。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)		
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容	
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	利用者が着たい服をご自身で選んでもらうよう心掛けている。髭剃りはなるべくご自身でしていただき、できない部分の支援を行っている。コロナ対策で散髪や毛染めは職員が行うようにしているが、状況によっては、家族の支援をいただく等し、行きつけの美容院を利用いただいている。			
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	調理は、隣接の厨房で専門の職員が行っているが、日曜日や元旦、必要時などは施設で行っている。その際、野菜の皮むきやカット等の下ごしらえや調理などを利用者も一緒にやっている。食後は食器洗いやお盆拭きを手伝われている。食事は検食と一緒にとるようにしていたが、現在は感染症対策のため、実施していない。誕生日等には利用者と一緒にケーキなどのおやつ作りをし、お祝いをしている。メニューについては、利用者に希望を伺い、反映できるように努めている。	隣接する建物(元デイサービス事業所)で配食サービスの弁当と事業所の食事を作っている。事業所では炊飯のみを行い、届いた主菜・副菜を利用者にあった形状で提供している。好き嫌いやアレルギーの有無の把握もしており、苦手な献立や食材には代替えもある。全介助者は一名で、その方以外は出来るだけ自分で口へ運んでもらえるよう、声掛けなどで促している。食器や箸にも工夫があり利用者の食欲は良好である。誕生日は当日に祝い、全員に刺身が添えられる。コロナ禍もあり、職員の食事は別になったが、見守りをしながら同席している。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は栄養士が作成しており、バランスのよい食事が提供できている。食事形態は、職員が各利用者の状態に合わせ、刻みやお粥、トロミをつけるなどし、その方に適した形態にして提供している。水分も定時間ごとに提供し摂取して頂いている。また、食事量や水分量をチェック表に記入し、随時確認をしている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食後は必ず口腔ケアを実施しており、介助の必要な方は、支援を行っている。また、義歯は、夜間、洗浄剤につけ衛生管理を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	排泄チェック表を確認しながら、その方の排泄パターンに合わせ排泄の声掛けや排泄介助を行っている。夜間はポータブルトイレやオムツを使用されている方も、日中はトイレでの排泄をしていただくよう支援している。	排泄に関して約半数の方は自立しているが、任せたままでなく、さり気ない見守りを行っている。日中はトイレでの排泄を主とし、チェック表からタイミングを図ることでオムツ・パット類の使用枚数減にも取り組んでいる。トイレまでの歩行を考慮すると少しだけ早く誘導してみたり、職員の工夫は続いている。入居後のケアによって布パンツとパットの組み合わせで済むようになった方や、寝たきり状態の方がトイレでの排泄が出来るまでに改善した例もあり、費用負担の軽減だけではなく、ADL向上へも繋がっている。トイレ内には手すりや可動式ひじ掛けの設置があり、自立を促す補助具として役立っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食物繊維や水分をしっかり摂っていただき、また、散歩や室内での運動を実施し、なるべく自然な排便となるよう心がけている。排泄チェック表により排便の有無を確認し、必要時は医師の処方による便秘薬を使用し、定期的な排便を促している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴は、各利用者の体調に合わせて、各人週2、3回程度の入浴を実施している。入浴剤を使用したり、季節の行事としてしょうぶ湯やゆず湯などで季節を感じて頂くなどし、気持ちよく入浴頂けるよう支援している。入浴されなかった日は、更衣や清拭を行い、清潔保持に努めている。	入浴は週2～3回を目安にしているが、希望があればそれ以上も可能である。拒む方もなく、ひとりずつゆっくりと寛いでもらっている。浴室の隣りにあるトイレは、廊下側から回らずとも脱衣場の引き戸を開けると通じる設えで使い勝手がよい。浴槽はコーナーにはではなく、両側から介助しやすい位置に設置しており、ベンチタイプの移乗台があることで安全に浴槽へ浸ることができる。冬場は予め脱衣場から浴室側へ暖気を送ることでヒートショック対策としている。安定感のある木製ベンチもあり、衣服の脱ぎ着は出来るだけ本人に任せ、職員は安全面に配慮しながら見守っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各利用者のリズムに合わせて、居室やホールのソファなどで休息して頂いている。日中はなるべく活動する事により、夜間は良眠できるよう声掛けと支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の情報を個人カルテに綴じ、いつでも確認できるようにしている。変更があった場合は申し送りノートに記載し、情報を共有し、状態の観察を行っている。服薬は見守りと介助を行い、また、チェック表に記載をするなどし、確実に服薬いただいている。日々状態の観察も行き、変化がないかどうか確認を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	洗濯物干し、洗濯物たたみなどの家事を一緒に行ったり、利用者の望まれる活動(読書や貼り絵など)や、歌の好きな方は、一緒に歌うなど気分転換を図っている。自動車図書館が定期的に来ており、読みたい本を選んでいただいている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天候の良い日は近所の散歩にでかけたり、町内に自宅がある方はその近辺へドライブにでかけている。また、季節ごとに季節を感じられるような場所へ出かけている。コロナ禍以前は、利用者の希望により食堂やすし屋へ昼食を食べに行ったり、家族の支援により自由に自宅や家族の家に行かれたり泊まれるなどされていたが、現在は制限させていただいている。	コロナ禍前は、天候や体調をみて当日に決まり出掛けることもあった。食材やおやつを買物にも同行していたが、まだまだ自粛していることも多い。そのような状況下でも、近くであればドライブに出掛けたり、行先の人出をみて降車を決めるなど臨機応変な判断も始めている。利用者の想いに沿った外出支援が出来るよう努めている。また近所への散歩は日常的に行っており、出会った方々と挨拶を交わしながらゆっくりとしたペースである。利用者は日差しを浴びながら、五感の刺激にもなっている。外出が難しい一名は、せめてリビングまではと移動してもらい、みんなと共に過ごしている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭は施設で管理を行っているが、少額ではあるがご自身で所持されている方もいる。外出時や希望時にはご自身でお金を所持いただき使用できるよう支援を行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話は、希望時は使用いただき、自由に家族や知人との交流が出来るよう支援している。また、携帯電話を所持されている方は自由に使用されている。年賀状を毎年作成しており、可能な方は自身で塗り絵をして頂いたり、自筆で名前を書いていただいている。		

自己	外部	項目	自己評価 (事業所記入欄)	外部評価 (評価機関記入欄)	
			実施状況	実施状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	湿度や温度、光などに配慮を行い、気持ちよく過ごしていただけるよう努めている。利用者と一緒に季節の飾りを作り掲示したり、テーブルに季節の花を飾るなどし、季節感を感じて頂けるよう支援している。	利用者が寛ぐリビングにはカーテンではなく障子が使われ、自宅と似た雰囲気を作っている。窓は二重ガラスで気密性が高く、冷暖房や結露対策にも効果が表れている。利用者の動線上に行動を妨げる物はなく、廊下は車椅子利用であっても十分な広さである。歩行訓練をする方もある。玄関に置かれた椅子からは、安全に靴への履き替えをしている様子が窺える。時節柄、換気には注意を払い、キッチン側の窓は常時開けている。手を触れる箇所の消毒はこまめに行い、トイレや浴室はきれいに掃除され、嫌な臭気もない。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共有空間にはソファを設置し、利用者の望まれる場所でテレビを観るなどしゆったり過ごしていただいたり、会話を楽しんでいただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ダンスやベッドは施設で準備をしているが、本人の使い慣れたものや必要なものがあれば自由に置いていただいている。寝具は入居前の生活様式どおりで、畳タイプの部屋ではベッドを使わない希望にも応えている。居室には利用者や家族の写真を飾るなどし、心地よく過ごしていただけるよう配慮を行っている。	居室には和室と洋室の2タイプがある。整理ダンスとベッドは備品として用意されているが、和室でのベッド使用を好まない方にはその希望に沿っている。持ち込む品物も火気等の危険物以外に制限はない。家具の配置や室内の飾り付けは利用者と話しながら行い、居心地よく過ごしてもらえよう支援している。リネン類は専門業者に任せており清潔が保たれている。天気の良い日には寝具を干す手間も惜しまない。家族が希望すれば居室での宿泊も可能である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室の入口には名前を、トイレには「便所」の掲示をし場所を理解いただけるようにしている。通路には手すりを配置し、障害物になるような物を置かないようにして、自立し安全に生活ができるように配慮している。		

V. サービスの成果に関する項目(目標指標項目)アウトカム項目))(事業所記入)
※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印をつけてください	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる。 (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の
			2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が一緒にゆったりと過ごす場面がある。 (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている。 (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている。 (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている。 (参考項目:49)		1. ほぼ全ての利用者が
		○	2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている。 (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓ 該当するものに○印をつけてください	
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている。 (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています。 (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている。 (参考項目:2,20)		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度ある
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている。 (参考項目:4)		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くない
66	職員は、生き生きと働いている。 (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う。	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う。	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどいない